

連続講座「国民国家と多文化社会」第8シリーズ

向こう岸（ラテン・アメリカ）からの問いかけ

第1回 6月8日（金）

基調報告：西川 長夫（立命館大学国際関係学部）「向こう岸からの問いかけ」

報 告：石原 保徳（和光大学非常勤講師）「新しい世界史記述の誕生－16世紀・大西洋圏からのメッセージ－」

コメンテータ：清水 透（慶應義塾大学経済学部）
佐々木康之（立命館大学文学部）

第2回 6月11日（金）

報 告：小林 致広（神戸市外国語大学外国語学部）「敗者の歴史でないインディオ史は可能か？」

コメンテータ：初谷 譲次（天理大学国際文化学部）

第3回 6月18日（金）

報 告：鈴木 茂（東京外国語大学外国語学部）「ブラジルの奴隷制廃止運動がめざしたもの－ジョアキン・ナブーコの人と思想」

コメンテータ：布留川正博（同志社大学経済学部）
加藤 恒彦（立命館大学国際関係学部）

第4回 6月25日（金）

報 告：浜 忠雄（北海道教育大学岩見沢校）「ハイチの独立と国民国家形成」

コメンテータ：西川 長夫（立命館大学国際関係学部）
小澤 卓也（立命館大学日本学術振興会特別研究員）

第5回 7月2日（金）

報 告：東 琢磨（音楽評論家）「21世紀に向かうカリブ、ラテン・アメリカ音楽」

コメンテータ：工藤多香子（東京外国語大学日本学術振興会特別研究員）
江口 信清（立命館大学文学部）

第6回 7月3日（土）

コンサート：大島 保克（沖縄八重山）／ホセ・ドゥルック（ドミニカ共和国）／出前チンドン（立命館大学学芸系サークル）

解 説：東 琢磨（音楽評論家）

場所：立命館大学アカデメイア立命21 K 209会議室

（第6回は立命館大学アカデメイア立命21 中野記念ホール）

時間：16：30～19：00

向こう岸（ラテン・アメリカ）からの問いかけ

立命館大学・国際言語文化研究所では、1994年秋から「ヨーロッパ統合」「多元主義カナダ」「ポスト・アパルトヘイトの南アフリカ」「オーストラリアの鏡・日本の鏡」「アジアにおける国民統合とエスニシティ」「国民国家とアジアの現在」「国民国家のはざまの南アジア」の表題で、連続講座＜国民国家と多文化社会＞を開催してきました。

今回おこなわれる第8シリーズでは舞台を「東インド」から「西インド」へ、海を越えて、「新たな世界」、ラテン・アメリカに移します。

ラテン・アメリカは遠くて近い世界です。今、あなたが口に運ぶジャガイモやトマト、トウモロコシやトウガラシも、デザートのチョコレート、食後の一服のタバコも新たな世界の贈り物でした。ひとつの世界に多くの物をもたらしたのです。「インディオ」が姿を現わし、ひとつの「人間」の概念にほころびが生じました。「世界のすべての民族は人間である」と知者は声をあげました。それまで、唯一の

「言語」とみなされていたラテン語に加えて、スペイン語が「言語」と認められました。しかし、皮肉にも、それは「帝国の伴侶」(!)としてラテン・アメリカの多くの言語を、ひとつにする道具となったのです。こうしてヨーロッパの歴史が、ラテン・アメリカをむしばみはじめる。「言語」が、「魂」が、「歴史」が征服されていく。たくさんの奴隷が生まれ、やがて「自由・博愛・平等」の声がヨーロッパから聞こえてきました。解放の父がラテン・アメリカを巡り、独立を促しました。「言語」が、「民族」が、「歴史」が、「多」から「一」に向かって歩み始める。そしてヨーロッパの「歴史」のはじっこに、席が予約される。テーブルの上には、多くの食材があわさった、すばらしい味とかぐわしい香り。この誘惑に身をゆだねましょう。いつもひとつのテーブルにしか座らないあなた！ テーブルは沢山あるのです。あちらのテーブルに移りましょう。遠くない、遠くない。